

令和 4 年 5 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00101

研究課題名（和文）フランクフルト学派における戦略的パフォーマティヴィティとメディア性の解明

研究課題名（英文）Elucidation of strategic performativity and mediarity in the Frankfurt School

研究代表者

竹峰 義和（Takemine, Yoshikazu）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20551609

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：3年間の研究を通じて明らかになったことを簡潔にまとめるならば、1．技術メディアを主題にしたフランクフルト学派の著作が、既存の社会体制のなかで覆い隠されたものを大衆に知覚経験させるという志向が共通して認められること、2．テキストの修辭的なレベルにのうちにも、読者にオルタナティブな知覚経験をパフォーマティブなかたちでもたらしよるような戦略的な工夫が施されていること、の二点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、フランクフルト学派の思想家たちのテキストを、文体や修辭技法、読者の解釈行為など、従来見過されてきた側面に着目しつつ分析したことで、ラジオや映画、テレビといった技術メディアは、彼らにとって思弁的な省察対象だけでなく、支配体制のイデオロギーに抵抗するための批判的な視座を一般大衆のなかに涵養するための教育媒体としての意味ももっていたことを明らかにした。この点は、非実践的な知識人集団というフランクフルト学派にまつわる一般的なイメージを一新するという点で大きな学術的意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：To briefly summarize the results of the three years of research: 1. It is commonly recognized that the Frankfurt School's writings on technical media have a common desire to allow the public to perceive and experience hidden elements in the existing social system. 2. Even at the rhetorical level of the text, strategic ingenuity has brought the reader an alternative perceptual experience in a performative manner.

研究分野：表象文化論

キーワード：フランクフルト学派 ベンヤミン アドルノ クルーゲ メディア パフォーマティヴ

1. 研究開始当初の背景

フランクフルト学派の思想家であるヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)、テオドル・W・アドルノ(1903-69)、アレクサンダー・クルーゲ(1932-)の三人のテキストには、一般的な学術書とは異なる顕著な表現上の特徴が認められる。すなわち、比喩や誇張といった修辞技法が多用されたり、引用がモンタージュ的に展開されたり、アフォリズムや断章などの特殊な形式が用いられるという点である。さらに、思考を表現する媒体も、言葉で綴られたテキストの枠を超えて、ラジオや映画などの他のメディアにも拡張していく傾向をもつ。たとえば亡命前のベンヤミンはラジオ放送用の物語を数多く執筆し、アドルノも1950年代後半からラジオで盛んに講演や対談を行った。そしてクルーゲが理論書や小説の執筆と並行して、映画やテレビのために無数の映像作品を制作してきたことは言うまでもない。

これら三人の思想家を特徴づける叙述スタイルと発信媒体のインターメディア性は、それぞれの思想内容と切り離すことができない。一般にフランクフルト学派は、真理を理論的・体系的に立証することでも、対象を客観的に分析することでもなく、哲学体系や客観的真理といったカテゴリーを批判的に解体し、政治や思考の暴力によって抑圧・忘却された契機を追想することを思想的課題としたと言えるが、それは旧来の哲学言説を構成してきた表現方法や媒体への懐疑をつねに伴っている。つまり、彼らの特異なエクリチュールやメディア横断的な活動そのものが、伝統哲学にたいする批判実践にほかならないのだ。そして、その射程のうちには、テキストを媒介とした思想と読者の関係も含まれている。ベンヤミン、アドルノ、クルーゲにとって、テキストとは真理を伝達する透明な媒質ではもはやない。むしろ彼らは、修辞表現・様式・媒体などの複数のレベルで新たな仕掛けを戦略的に導入することで、読者がテキストの受動的な受容者ではなく、能動的な思考主体としてテキストの意味産出の過程にみずから参与し、批判的省察とともに遂行するようパフォーマンスに働きかけることを企図しているのではないか。そしてさらに、究極的には、ラジオや映画などのテクノロジー・メディアも駆使しつつ、読者にオルタナティブな知覚経験を行うことを可能にする媒体を創出することがそこで目指されているのではないか。本研究は、この二つの「問い」を考察の出発点に据えたいうえで、フランクフルト学派の言説戦略を包括的に検証する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、具体的には以下の三つに大別される。

ベンヤミンとアドルノの著作におけるパフォーマンス・ヴィティティを、自己省察、引用、擬態などの観点を軸に考察することで、彼らのテキストが読者に与える認識論的・知覚的效果を解明する。

ベンヤミンとアドルノのラジオとの理論的・実践的な関わりを再構成することで、フランクフルト学派の言説戦略のなかでテクノロジー・メディアが占める意義を明らかにする。

クルーゲの映像作家としての活動を、その作業で析出されたフランクフルト学派の思想的系譜のなかに位置づけたうえで、今日のメディア文化批判にとってもちうる射程と限界を精査する。

3. 研究の方法

本研究は以下の四つの観点を軸に遂行される。

テキスト構成によって展開される自己省察性

ベンヤミンが初期ロマン主義の芸術批評に登場する自己省察性のモチーフに着目したことは知られているが、批評的テキストを一種の省察媒体へと変換するというプログラムは、「複製技術時代の芸術作品」(1936-39)や「歴史の概念について」(1940)のほか、アドルノの『ミニマ・モラリア』(1951)、クルーゲの『歴史と我意』(1981)など、アフォリズムや断章形式のテキストにも当てはまる。本研究では、そうした無数の断絶面が織り込まれた多孔的な構成のうち、読者を思考主体として自己省察の運動に参与させるというパフォーマンスな機能があることを立証する。

モンタージュおよび引用のインターメディア性

ベンヤミン、アドルノ、クルーゲにとって、モンタージュと引用はたんなる叙述技法にとどまらず、一貫した思考・表現原理をなしている。両者はともに、もとの文脈から切り離された諸要素を柔軟に連結することで新たな意味を現出させる効果をもつが、本研究で注目したいのは、そこに潜在するインターメディア的な指標性である。ベンヤミンにあってモンタージュ技法の原型と呼べるのがバロック文学の寓意表現だが、それは「文字像」として言語と画像という二つのメディアを横断的に総合する特質をもつ。さらに後期著作では、既存のジャンルや表現媒体どうしがモンタージュされることで新たな表現形式が生まれるという認識のもとに、技術メディアがその主要な動因として位置づけられる。そうしたベンヤミンのヴィジョンは、現代のメディア環境を予見していると言えるが、本研究は、その思想的内実を近年のCritical Media Studiesの成果(von Gehlen, Mashup, 2001など)との比較をつうじて精査する。そのうえで、かかるイ

ンターメディア的な指標性が、後期アドルノの美学理論およびクルーゲの映像作品によってどのようなかたちで受け継がれたかを示す。

挑発技法としての誇張と擬態

アドルノの著作には、読者にパフォーマンスに働きかける手段として、誇張と擬態という二つの修辞技法がしばしば用いられている。たとえば文化産業論には数多くの誇張表現が見られる一方、アメリカ亡命期の社会学的研究では実証主義的なスタイルを意図的に模倣している形跡が随所に確認できる。本研究では、そこに(1) 論述手法や対象の自明性を解体し、読者に複数のパースペクティブを挑発的に開示するイロニー化(2) 批判対象のスタイルを逆利用することで、その欠陥や問題点を例示する「対抗毒」の手法、という二つの特徴が認められることを示すとともに、イージーの受容美学や言語行為論の脱構築的解釈を参照しつつ、アドルノの言説戦略を理論的に基礎づける。

省察・経験媒体としてのテキスト/技術メディア

ベンヤミンとアドルノの言説上の仕掛けの最終的な狙いは、おのれのテキストを省察・経験媒体へと変容することにある。彼らにとってテキストとは受動的な受容対象ではなく、読者をさらなる省察へと誘い、あるいはアドルノの言う「非同一般的なもの」を知覚経験させるインタラクティブなコミュニケーション空間となるべきなのだ。さらに、そこで省察・経験媒体へと機能転換されるべきもののうちに、狭義のテキストや芸術作品のみならず、技術に媒介された大衆メディアも含まれていることは、ベンヤミンとアドルノのラジオとの実践的な取り組みや、クルーゲの映画作品やテレビ番組が明確に示している。本研究では、(1) 1920-30年代のベンヤミンのラジオ放送劇(2) 1950-60年代のアドルノのラジオ講演活動(3) 1980年代～現代のクルーゲのテレビ制作者としての活動を比較検証することで、フランクフルト学派の言説戦略とメディア実践との思想的連関を解明する。さらに、省察・経験媒体としてのテキスト/メディアという理念が今日の社会にとってもちうるアクチュアルな可能性について、既存のメディア体制にたいする内在的抵抗という面から考察する。

4. 研究成果

2019年度は、ベンヤミン、アドルノ、クラカウアー、クルーゲにおけるテキストと受容者との関係について検証する作業を中心に研究を進めた。また、2020年2月にドイツ・マールブルク文学資料館を訪れ、そこでアドルノとクラカウアーの未刊行の草稿資料の調査を行った。そこから判明したのは、1) 彼らのテキストにおいて、知覚、経験、省察というモチーフが主題的に考察されているだけではなく、それがエクリチュールの次元における表現形式と深く関連しているという点、2) みずからのテキストを広義における「公共圏」において大衆の経験の地平を拡張する媒体のひとつとして捉えているという点だった。また、当初の研究計画ではあまり重視していなかったクラカウアーの後期の映画論とその関連草稿もまた、フランクフルト学派の思想におけるメディアと経験にまつわる問題や、受容者の位置付けに関して重要であることを確認できた。

2020年度は、読者にたいするパフォーマンスな効果という観点から、ベンヤミンの複製技術論文の構成の変遷を解明することと、アドルノの音楽演奏論における合理化というモチーフのインターテクスチュアルな関係を分析することを中心に研究を進めた。結果として明らかになったのは、1. ベンヤミンの複製技術論文が、執筆当初より複数の異なる思想的断片からなるモンタージュ的なテキストとして構想されており、各断章の齟齬をつうじて読者にさらなる思考を促す効果をもっていること 2. 「音楽の合理化」をめぐるアドルノの思考が、ウェーバーの合理化論を検証しつつも、合理性を超越する可能性をほかならぬ合理性に求めるという点で異なっていること、そして、そのような合理性への内在的批判がエクリチュールの次元で戦略的に遂行されていることである。

2021年度において主な研究課題としたのは、1. ヴァルター・ベンヤミンの思想における「再帰性」のモチーフの検証 2. テオドール・W・アドルノによる表象不可能性をめぐる議論を、読者にたいするパフォーマンスな効果から考察する作業 3. ジークフリート・クラカウアーとミリアム・B・ハンセンの映画理論を結びつける「ヴァナキュラー・モダニズム」の概念の理論的射程を、知覚という点から明らかにする作業の3点である。結果として明らかになったのは、1. ベンヤミンの初期媒質論や初期言語論に見られる「再帰性」のモチーフが、後期思想においては、テクノロジーを媒介とした大衆の自己省察というモチーフと、複数の時制を入れ子式に包含する「現在時」というモチーフとに受け継がれたこと、2. アドルノとポストモダン思想の双方が、アウシュヴィッツのように表象不可能なものを表象するという芸術作品が抱えるアポリアにとどまりつづけることを読者に要請していること 3. クラカウアーとハンセンの映画論において、映画メディアが、モダニティにまつわる日常的な経験を反映・媒介することで、観客大衆にオルタナティブな知覚を付与するという機能をもつものとして位置付けられていることである。

3年間の研究を通じて明らかになったことを簡潔にまとめるならば、1. 技術メディアを主題にしたフランクフルト学派の著作が、既存の社会体制のなかで覆い隠されたものを大衆に知覚経験させるという志向が共通して認められること、2. テキストの修辞的なレヴェ

ルにのうちにも、読者にオルタナティブな知覚経験をパフォーマンス的なかたちでもた
らすような戦略的な工夫が施されていること、の二点である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹峰義和	4. 巻 144
2. 論文標題 ミッキーマウスの経験：後期ベンヤミンにおける経験概念	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ベンヤミンの経験への問い：1930年代を中心に（日本独文学会研究叢書）	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹峰義和	4. 巻 49
2. 論文標題 表象の自己贖罪：アドルノ美学とポストモダニズムの接点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 219-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹峰義和	4. 巻 48-17
2. 論文標題 「音楽の合理化」の弁証法：ヴェーバーとアドルノの音楽論をめぐって」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 174-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹峰義和	4. 巻 160
2. 論文標題 暗い時代のカタツムリ アレクサンダー・クルーゲのレッシング賞受賞演説における 文芸公共圏の 理念	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Neue Beitræge zur Germanistik	6. 最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹峰義和
2. 発表標題 「ミッキーマウスの経験 : 後期ベンヤミンにおける経験概念」
3. 学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yoshikazu Takemine
2. 発表標題 Die strategische Performativitaet der Frankfurter Schule
3. 学会等名 Institute of Philosophy, KU Leuven (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Yasuhiro Sakamoto, Felix Jaeger, Jun Tanaka (Hg.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 160
3. 書名 Bilder als Denkformen: Bildwissenschaftliche Dialoge zwischen Japan und Deutschland (分担執筆 : 担当 : Die Kraft des Blickes: Zum Motiv des Ansehens / Angesehen- Werdens als aesthetischer Erfahrung bei Walter Benjamin, pp. 57-66)	

1. 著者名 堀 潤之、木原 圭翔 (編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 312
3. 書名 映画論の冒険者たち (執筆担当第I部「ジークフリート・クラカウアー : 偶然、事物、リアリズム」(60-72頁)、第IV部「ミリアム・ハンセン : 映画経験とモダニティ」(199-209頁))	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------